

2016年に発行された第23巻第4号は、「作業を教えること (Teaching Occupation)」の特集に関わる7編の論文とそれ以外の研究論文3編,そして2014年にカナダ作業科学協会の学術集会で行われた「TownsendとPolatajiko講演」と2015年のアメリカ作業科学研究会学術集会で行われた「Ruth Zemke講演」の講演録を含む計12編が掲載された多彩な内容となっている。

この雑誌には論文区分として新たに「作業を教えること (Teaching Occupation)」が加わり,その紹介を兼ねて本号の中で作業科学の教育に関する特集が組まれている。この特集については,編集長のClare Hockingによる新しい論文区分についての説明の後,名誉教授を含むカナダ,イギリス,アメリカ,スウェーデンの大学教員が,「歴史的な教育改革者と作業科学の接点」,「教育プログラムを構築するにあたって基盤となる概念や教育内容の提案」,「初期教育プログラムで作業を教えることの意義」,「具体的なコースの紹介」などについて寄稿している。

Hocking(2016)は,新しい論文区分を加えた趣旨を説明し,この雑誌の創設者であるAnn Wilcockが掲げた人の作業的な本質を中心に据えた教育哲学を引き継ぎ,「なぜ・どのように作業科学が教えられるか」について投稿を通して活発に議論することを勧めている。また,Hockingは,この論文区分で研究者や学識者が扱える課題についても具体的な質問形式で提示している。その中には,「この領域に一貫性を与える哲学的あるいは理論的な見解は何か?」といった教育基盤に関する質問の他に,作業科学コースの内容に関わる質問や教授法についての質問が含まれている。

Townsendら(2016)は,世界のリーダー達が公正や人権を中心とした教育や専門的実践を行うように呼びかけてきたことを受けて,作業科学者が教育改革者達から公正と人権について何が学べるかを問うことを目的に寄稿している。その答えとして,19世紀および20世紀にヨーロッパ,グレートブリテン,北アイルランド連合王国,アメリカ大陸で生じた教育改革者の取り組みが,今日の作業科学研究と教育へ新たな洞察を促すことを論じている。また,Philip Magnus, John Dewey, Octavia Hill, Maria Montessori, Eduard Lindeman, Thomas Kinderとそれに続く人々の取り組みを紹介しながら,社会的,経済的不公正と作業との結び付きという点に過去の教育改革と作業科学の接点があることを結論付けた。

Sadle(2016)は, Meyerとland(2003)が示したthreshold concepts(科目の基礎となり,学生が最低限習得しなければならない概念)が,作業の科学に焦点を当てた教育プログラムに含めるべき知識を検討するのに有益であると述べている。さらに,Clarkら(1991)によって発表された作業を促進する基本的人間システムに含まれる下位システムがこの概念に当たると考え,下位システムの説明と各システムの改訂内容を提案している。下位システムは,南カリフォルニア大学で作業に焦点を当てたコースを検討した時に出てきたアイ

ディアであるが、文脈に良く適応しながら、様々な作業に参加する人固有の能力を研究するのに必要不可欠な枠組みである。身体的、生物的、情報处理的、社会文化的、象徴—評価的、超越的の6つの下位システムから成る。この下位システムを改訂する過程では、初期の分け方が妥当であることが確認され、その後の神経科学の進歩によって各システムの初期の見解を補えることが述べられている。

特集の後半は、作業科学を作業療法学生や他の大学生に教えるためのカリキュラム内容や教育実習について書かれている。

Zemke(2016)は、博士レベルの研究者を輩出する米国南カリフォルニア大学の初期教育プログラムを辿りながら、学士レベルで作業を教えることを提案している。彼女は、作業科学の本来のビジョンが、複雑な社会問題の根絶に貢献することであることに触れ、そのためには全ての人に作業科学の基礎を紹介する必要があると述べている。通常、作業科学の学士号は、大学院の専門職学位を目指す者だけが取得する。しかし、作業科学を副専攻で履修することによって、大学生は個人的な生活を理解し、人々の健康的な作業を目指す作業科学者の働きかけに参画することを示唆している。

Bagatell と Womack(2016)は、作業科学を教える動議の中には作業療法の哲学的基盤を提供することへの期待がありながら、そのための探求がほとんどなされていないことを指摘する。さらに、作業の概念を洗練するための探求において作業科学者による作業の形態、機能、意味と、社会文化的な文脈の影響といった焦点の当て方が、作業科学の教育内容を実体験に基づく経験や行為のための人間の能力の探求から引き離している実情を問題視している。こうした問題へ挑むため、論文では作業を理解するための統合された全体としての行為のための人間の能力と、行為のための人間の能力を理解するための身体構造と身体機能の知識を取り上げて考察している。さらに、行為のための人間の能力を最前面に位置づける著者らの教育課程を例示し、この課程によって学生は作業、実体験に基づく行為、身体構造と心身機能の関係をより明確に理解できることを示唆している。なお、この行為のための人間の能力への焦点は、前出した6つの下位システムの中の身体的、生物的、情報处理的システムにも合致するものである。

Dickie(2016)は、作業療法学生を対象とした作業科学コースの実例として、著者が所属する米国ノースキャロライナ大学で行われている修士課程エントリーレベルのプログラムを紹介している。このプログラムは、作業と作業的存在としての人をテーマとし、1) 研究、理論、ジャーナリスティックな報告書を含む幅広い教材を使って作業の視点を批判的に評価し、比較する能力を実際に発揮すること、2) 成人の発達、適応、健康に関わる様々な見解と作業の関係を検討すること、を学習目標としている。また、このコースの教育過程ではLTD(話し合い学習法)も使われている。このコースを通して、学生が作業への関心を高め、様々な方法で作業について学ぶことを理解し、作業が個人の経験以上であることを認識し、作業療法実践の中心として作業科学に価値を置くようになることを狙っている。

特集の最後では、Hooper ら(2016)が行った作業の教育に関するレビューの結果が報告さ

れている。著者らは、米国作業療法プログラムで作業科学の教育は行われているのかという点と、どのように教育が行われているかを探ることを目的に、作業の教育に関わる3つのタイプのデータを収集して質的な分析を行った。その結果、作業科学そのものの教育よりも作業科学の概念や研究成果が広く教えられていることが明らかとなった。一方で、作業に関する概念がその起源である作業科学から切り離され、カリキュラムの中に散在していることを問題視している。以上を踏まえ、作業科学に明確に関連付けて作業の概念を教えることと、作業科学を独立して教えることが提案されている。

一方、特集以外の研究論文では、子どもの作業を探求するためにその親を対象に調査した研究2編と移行についての研究1編が掲載されている。

Asbjørnsletta と Bekkenb(2016)は、健常(障がい)児のスポーツ作業へのインクルージョンを行為のストーリーとして探求することを目的に、日常生活を尋ねるインタビューによって障害のある男児の母親1名からデータを集め、それをナラティブアプローチで分析した。また、分析にあたっては、この男児の経験と彼の対人的な遊びを行為主体性(agency)とパワーの視点で理解することを試みている。また、インクルージョンについての母親のストーリーを捉えることで、人々の間で何が起きているかに着目した分析がなされている。結果では、いかに能力差が受け入れられ、励まされ、そして賞賛されるかということ、そして健常(障害)は知識と文脈に関わることが示されている。

Nelson ら(2016)は、子どもを保護することと、年齢相応にリスクを負う機会を提供することの間で、バランスをとるといふ大人のジレンマに関する質的研究を行った。研究は、まず27名の定型発達児の親と10名の社会的または身体的な障害のある子どもの親を対象に、子どもに優先される態度を確認するためのカード分類を行った。その後、これらの態度の達成をリスクがどのように助けるかを半構造化面接で尋ねた。また、定型発達児に関わる8名の教師にも親の捉え方についての面接を実施した。インタビューデータの分析には解釈的現象学のアプローチが用いられ、結果では、リスクと子どもの成長のバランスをとるための戦略として、大人が不確実性を管理する方法や、日常生活の中でリスクを管理する習慣を子どもに提供するための方法が示された。

Scalzo ら(2016)は、突然の病気やトラウマ後の予期あるいは望まれなかった人生の段階、状態、地位への移行を扱っている。この論文は、作業の視点とその他の視点で書かれた移行に関する文献をレビューし、作業の視点と他の視点で書かれた文献の相違点や、予期しなかった健康関連の移行の定義を作業の視点を用いて作ること等を目的としている。作業の視点については、OTDBase で文献を検索し、他の視点は Medline, CINAHAL, PsycINFO, Web of Science で移行の定義と説明が検索された。結果では、これら2つの視点の類似点として、両者には個人の視点からの移行の経験、感情や身体変化、社会的サポートの強い必要性が記載されていた。異なる点として、作業の視点からの文献には、移行に対処し、ウェルビーイングに寄与する意味ある作業の役割が述べられていた。それに対し、他の幅広い視点で書かれた文献では、不確実性とアイデンティティの問題に対処する内的過程のことが強

調されていた。以上を踏まえ、この論文の最後では、作業の視点から移行の定義を提案し、個人的な生活や社会的な生活に変化をもたらす方法を作業が提供していることを定義に含めている。

この雑誌には、作業科学の学術集会で行われた講義の講演録と講演内容を基に書かれた論文もある。

Shaw(2016)は、2014年の「TownsendとPolatajiko講演」で『仕事の移動に関する過去の意味と今後の地平：カナダ人と作業科学の応用』をテーマに講演を行った。この講演では、社会の中の多様な集団が経験している、未解決な作業的不公正の問題に対処することを目的に、今後作業科学研究を展開するための提案をしている。特に、講演では若者が直面している仕事の不均衡に焦点をあて、複雑な社会や健康問題に対する可能性を柔軟な思考で探るための研究方法として Causal Layered Analysis (因果階層分析; Inayatullah, 1998, 2004) とその研究例が紹介されている。この方法は、一般には過去と現在についての分析を行うが、講演では1800年代初頭から2014年までのカナダの歌の歌詞に表現された仕事の移動の意味と、現在のカナダの大学院生の学習経験を探求した結果を述べている。分析結果からは、好まれる将来を確認することから生まれる機会が、アクションや政策変革のために役立つことが示されている。講演のまとめとして、講演で示した柔軟な思考によって、社会問題が生まれる過程を理解し、さらに倫理的で共感的、そして人間らしい作業の感覚をカナダ社会に作り出す新たな「すること *doing*」の方法や可能性の解明ができることが提言されている。

Humphry(2016)は、2015年の「Ruth Zemke講演」で『作業に参加する、作業を解釈的に再現する、作業の変容：そもそも“どうやるかを知る”とはどういうことか?』をテーマに講演を行った。彼女は、乳児期における作業の出現を理解するために、周囲の人々が行う日常的な作業に参加するために乳児がしていることを詳細に探求することを提案している。先行研究のレビューと著者自身の観察から、乳児の意図的な行為の調整に着目し、乳児が文化を反映するケアの実践に応じることで対人的な作業空間が作られていること、乳児が人々の行為を意図的に感じとっていること、乳児が何かをすることに積極的に関与することが周囲で同じことをしている人々にさらなる注意を向ける用意をさせること等を示唆している。以上から、乳児期の参加は何かをしようとすることであると結論付けている。

最近では、わが国においても作業を中心においた、あるいは作業に基づく作業療法が活発に行われているが、それに併せて作業科学を学びたいとの声も数多く聞かれるようになった。このような声を聞くたびに、その期待に胸が躍る一方で、単一のモデルや理論ではない作業科学という学問をどのように教えると良いのか思い悩むことも多い。本誌で組まれた作業科学教育の特集は、作業療法養成課程や大学院などで作業を教えるための方法を考える時の参考になるだけでなく、作業を学ぶ時にどのような点を押さえるべきかを知ることにも役立つ内容であった。個人的には、この特集の中で紹介されていた **threshold concepts** の考え方が参考となり、幅広い作業科学の教育を考える時の道標にもなるアイデアである

と思われた。また、初期に発表された「作業を促進する基本的人間システム」が新に見直されていることにも関心を持った。個人主義に偏るものとの批判を受けて、作業科学の講義でも教えられることが無くなったが、この見直しにはこの考え方の根底を支える学際的学問の進歩が関係していることも興味深い。米国の大学院で作業科学が始まってから 30 年になろうとしている。作業科学の知識をアップデートしながら、本格的に教育を考える段階に入った。

文献（雑誌掲載順）

- Shaw, L. (2017). Past meanings and future horizons of work mobility: Implications for Canadians and occupational science. *Journal of Occupational Science, 23(4)*, 405-421.
- Humphry R. (2016). Joining in, interpretative reproduction, and transformations of occupations: What is “know-how” anyway?. *Journal of Occupational Science, 23(4)*, 422-433.
- Asbjørnsletta, M. & Bekkenb, W. (2016). Openness to difference: Inclusion in sports occupations for children with (dis)abilities. *Journal of Occupational Science, 23(4)*, 434-445.
- Nelson, A., Bundy, A., Broom, A. & Tranter, P. (2016). Reframing healthy risk taking: Parents' dilemmas and strategies to promote children's well-being. *Journal of Occupational Science, 23(4)*, 449-463.
- Scalzo, K., Forwell, J, S. & Suto, J. M. (2016). An integrative review exploring transition following an unexpected health-related trauma. *Journal of Occupational Science, 23(4)*, 464-483.
- Hocking, C. (2016). Launch of “Teaching Occupation”. *Journal of Occupational Science, 23(4)*, 484-487.
- Townsenda, E. & Friedlandb, J. (2016). 19th & 20th century educational reforms arising in Europe, the United Kingdom, and the Americas: Inspiration for occupational science? *Journal of Occupational Science, 23(4)*, 488-495.
- Sadlo, G. (2016). Threshold concepts for educating people about human engagement in occupation: The study of human systems that enable occupation. *Journal of Occupational Science, 23(4)*, 495-509.
- Zemke, R. (2016). Extending occupational science education. *Journal of Occupational Science, 23(4)*, 510-513
- Bagatell, N. & Womack, L. J. (2016) Human capacity for action as core content in occupational science education. *Journal of Occupational Science, 23(4)*, 514-518.
- Dickie, V. (2016). A course in occupational science for occupational therapy students.

Journal of Occupational Science, 23(4), 519-524.

Hooper, B, Krishnagiri, K., Taff, D. S., Price, P. & Bilics, A. (2016). Teaching knowledge generated through occupational science and teaching the science itself. *Journal of Occupational Science, 23(4), 525-531.*